

永眠者記念礼拝 2020年9月27日(日)

題 「権威者は神に仕えてこそ」

テキスト：ローマへの信徒への手紙13章：1～10節
(聖書の箇所は最後にあります。)

先週は皆さまと共に、永眠者記念礼拝を主の恵みの内に行うことができ、墓前礼拝も主に慰められて行うことができました。心より感謝しています。皆様の祈りとご奉仕に感謝いたします。

さて、本日与えられた聖書の箇所は、とても理解するのに難しい箇所だと昔から言われており、確かにそうだと思います。できれば避けて通りたい箇所でもあります。大きな理由は、世界的に見て人類は経験したことの無いような第一次世界大戦、第二次世界大戦を経験し、日本であれば太平洋戦争でとてつもない人々の尊い命が奪われました。戦争の決断、決定は、日本だけではなく、世界で国家の指導者たちが行ったのです。戦争は偶然に起きるものではありません。ですから二度と戦争をすることがないようにと制定された日本国憲法の前文にも「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」と記されています。日本だけではなくどの国も、国家のトップが戦争行為を決定するのです。

今日のローマの信徒への手紙13章の聖書箇所は、ヨーロッパを始め世界中に、「国家と宗教」の関係を考えさせる内容を持っています。

さて、この箇所はパウロが生まれたてのローマのキリスト者の群れに送った手紙です。今日まで、聖書学者たちによって、キリスト者たちにとって、多くの研究、読まれ方、解釈、理解のされ方がなされて影響を与えて来ました。最初にはっきりお伝えできるのは、受け取り方に正解はないということです。それぞれが祈って、学んで、経験の中から自分で考えていくのです。今日の聖書箇所は国家と宗教の関係についていろんな理解ができるということです。

わたしは、「神さま、この箇所を通してあなたの言葉を聞かせてください。」と祈るしかないことを思わされます。

小見出しには、「支配者への従順」とあります。

1:人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。

2:従って、権威に逆らう者は、神の定めにくるくことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。

皆さまは、この言葉をどのように受け止められるでしょうか。

国家と宗教、教会の関係、戦争などで、身内を失った方々、迫害され獄中で死を遂げられた方々もおられます。厳しい思いの中で、様々に受け止められていると思うのです。今日、世界の民主主義国家では、国家も間違いを起こすことがあるので、教会や宗教は国家に対して「見張りの役」としての働きをしなければならないのだとの考えが戦後広まって来たと思われまゝす。しかし、今でも、独裁国家や全体主義国家は人々からの批判を受け付けない国もご存じのようにあるのです。また体制としては民主主義の国家でも国のリーダーの考え方で、独裁国家のような方向に向かう危険性はあるようです。

1 節のパウロのことばを文字どおり読むと、上に立つ権威、国家は、神が立てられているので、すべての人は国家に従うべきである、と受け止められます。

そう受け止めると、国家体制は良くても悪くても神が立てられたので、人々はそれに奴隷のように服従するしかないというおかしいことになります。

今から約 2 0 0 0 年前のパウロが生きた時代はそのような時代だったのです。ところで、旧約聖書によれば、今から 3 0 0 0 以上前、昔のイスラエルには、1 2 部族の共同体はありましたが国や王はいませんでした。人々は、他国のように王が欲しいと神に求めます。事あるごとに回りの他国が小さなイスラエルを攻めに定期的に来ていたのです。イスラエルの人々は王を持ったら敵の攻撃防げる思ったのです。

しかし、神さまは王を持つと他の国々のように、人々は王の奴隷になり、税もとられると何度も忠告されるのですが、イスラエルの人々はそれでもかまわないと言います。そしてイスラエルの最初の王としてサウロが立てられたいきさつが旧約聖書に記されています。

ところで、パウロ自身はローマ帝国に対して好意的だったとも言われます。確かにパウロはユダヤ人ですが、ローマの市民権を持っており、ユダヤ人からの迫害から助け出された経験が聖書には出て来ています。またパウロの時代にはキリスト者に対する厳しい迫害はあまりなかったとも言われています。後になってローマ帝国ネロ皇帝の時代に、キリスト者たちが厳しく迫害されることになるのです。

パウロの生きていた時代は「ローマの平和」と呼ばれていた時代です。強大なローマ帝国を脅かすような大きな戦争などはあまり起こらなかったようです。おおむね宗教の自由は認められていたようです。交通網も完備され、治水も完備され、世界各地に演劇場や浴場お風呂も普及して、人々はある程度ローマ帝国内での生活に満足していたようです。ローマの皇帝制度は、住人に気に

入られながら、長い年月、飴と鞭を使って自分の体制を維持していたのです。

パウロはそのような時代に、キリストを信じる群れに対して語っているのです。パウロは、もうすぐキリストが再臨されるという信仰に生きていたのです。ローマの信徒への手紙は、そのような終末を待望しながら、ローマで生きるキリスト者たちの具体的な日常生活に対する教えであったのです。

落ち着いた生活をする、いたずらに上に立つ権威者に逆らうことはせず、指導者の働きを尊重することをすすめることはあり得ると思うのです。特に、聖書の研究者にも様々な立場がありますが、最近ではこの13章の1～8節は、キリストの群れの中にいた、いわゆる熱狂主義に走る人々への忠告と理解しています。感情や陶酔的なムードに走る。理性を無視する。生活が著しく乱れる。自己本位で、道徳も乱れることもあったようです。コリントの信徒への手紙などでもパウロは忠告しています。そのような生き方ではなく、日々を落ち着いて、目をさまして生きようよとの忠告ではないかということですからパウロには神の立てた権威者は悪いことをするはずはないとの思いがあったのかもしれない。

ただ私たちは、現実の世界の歴史においては、この個所の理解をめぐる問題はあるのです。

この世の秩序は神が立てているのでそれに従わなければならいと理解し、それを人々に強要することがあったのです。これは極端すぎる考えだと思います。

ドイツでは、あの独裁者ヒットラーの時代の教会は、ヒットラーは実際は民主的な選挙で選ばれたのですが、当時の多くの教会は、神が立てたリーダーであると考えました。また公にヒットラーを批判すれば逮捕され処刑された時代でした。存在する権威がそのままで神に認められているという考えは時に、道を誤らせることがあるのです。それを利用して、聖書のことばを利用して、悪の力、サタンは働くことがあるのだということを歴史から学ぶことが大切なのです。

では、どう考えればよいのでしょうか。一般的なこの世の秩序は認めつつ、それをいかなる国家の体制も、神の名を利用して絶対化しないということが大切だと学ぶのです。

6:あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。

わたしたちも国家に税金を納めています。

わたしは、与えられた今回の祈りつつの聖書の学びから、それを理解するための書物からの学びから「宗教と国家」(宮田光雄著)、この世に生きる教会、キリスト者として大切なこと3つのことを示されました。

- 1、いかなる国家も間違ふことがあるということ、国家、国よりキリスト者の神、主イエス・キリストは上にあるということ。キリスト者は冷めた目で国家の動向を見極め、見張りの役割の奉仕をなしていく。
- 2、権威者は神に仕えて、神と人に仕えてこそ意味があるということ。
政治は大切な働きです。政治家は私腹を肥やしてはならず、神を畏れ、神に仕える、人に仕えることを神さまから託されている。つまり神を愛し、具体的には人を愛すこと。その国に生きている人を国籍は問わず、大切にすることです。
- 3、キリスト者は教会のことだけではなく、権威者、政治家の人たちのことを覚えて良き働きができるように日々祈ることの大切さを思います。
イエスさまはエルサレムに入場するのに戦争の象徴である軍馬ではなく、平和の象徴であるロバに乗られました。ここに神の平和が実現し、広がっていくのです。
隣人愛に生きること。互いに愛し合うこと、大切にし合うこと、この主イエスの教えの実行に尽きるのです。
8節に「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。」とあります。

イエスの十字架が世界に、特に日本に根付きますように。愛と正義と良心が根付きますように。そのためにわたしたちキリスト者が用いられますように願います。

◆支配者への従順

- 1:人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。
- 2:従って、権威に逆らう者は、神の定めに従うことになり、従う者は自分の身に裁きを招くでしょう。
- 3:実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。
- 4:権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。
- 5:だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。
- 6:あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。
- 7:すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

◆隣人愛

- 8:互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。
- 9:「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があつても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。
- 10:愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。